



「えだまめコーン」と子どもの「学び」

学校教育課 課長 中川 謙二

1. 「えだまめコーン」

少し「脂」と「糖」と「塩」が織りなす“罪深い美味”を世に放ってきた大手ハンバーガーチェーン店のM社が、3年ほど前から、本当に「えだまめ」と「コーン」が小さなカップに入っているだけの「えだまめコーン」なる商品を手掛けています。見栄えからして、私にとっては全く興味のわからない商品でしたが、子どもたちが「うえ〜」「後でポテトも買ってね」と嘆き、嫌がる反応を繰り返すテレビCMには、思わず目を奪われました。

「栄養バランスを考慮してスイートコーンにえだまめをプラスした、おいしく栄養を摂っていただけるメニューです。」とM社は推されていますが、単品280円という価格は、フライポテト® Sサイズ190円と比べても、決して安い買い物ではありません。実際食べてみましたが、霞の向こうから感じられるスイートコーンのほのかな甘味くらいでは、子どもたちも私も満足するはずがありません。しかし「ホンマにCMどおり…」と妙に納得しました。

2. 子どもが「欲しないもの」

それにしても、「えだまめコーン」を前に嘆き、嫌がる子どもの顔が画面いっぱいに映し出されるこの商品CMは、実によくできています。野菜嫌い、薬嫌いだった私の子どもとの駆け引きを思い起こさせ、さらには、紅ショウガが苦手だった私が手こずらせた、若き日の母の顔さえ思い出します。

思えば、こうした親子の駆け引きは、これまで綿々と続いてきたのでしょう。誰だって、子どもの嫌がる顔より、笑顔が見たいはずです。だからと言って子どもが欲しがるものだけ与えていては、子どもは育ちません。なだめすかして、時には叱って、何とか口に入れさせる…それは、子どもと教師の間、「学び」において変わらないものかもしれません。さらに言えば、「学校」に期待される役割は、本質的には、こうした子どもが「欲しないもの」、でも「必要なもの」をとらせることなのかもしれません。

3. 「料理人」と「教師」

かつて学生時代に「授業は料理に似ている」と話された先生がおられました。「そんなもんか…」と当時は気にも留めず、30年以上経ちましたが、今では私の十八番の話になっています。料理人が、食材を知り尽くし、それぞれの旬や強みを理解し、調理法を極める一方で、嗜好(しこう)と気候・体調等に合わせて客が欲するものを理解する…、それは、教師が教科専門性を極め、児童生徒理解を深める営みと、確かに似ています。どちらか一方がかけても、“お残し”が生じるからです。

優れた料理人が、一滴残さずスープを飲み干す客の姿を求めて、名店を食べ歩くように、私たちもまた、子どもたちの「先生、分かった!」の笑顔を求めて、優れた研修や授業・保育に出会うことが必要なのかもしれません。



『遊びの中の学び』

～子育て教育 Next プロジェクト～

幼児課 参事 内田 祥子

心が動く瞬間をとらえる

『心が動く瞬間をどうとらえていくか、感情が動くことで、認知能力と非認知能力が一体的に伸びる。』夏期研修講座での中山芳一先生の言葉が、心に残りました。

就学前教育保育の現場では、栗東市3つの力の自分を高める力・自分と向き合う力・他者とつながる力と幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿との関連性を可視化し、子どもたちの遊びの中の学びの姿に着目しています。

6月、市内園4歳児の水遊びの場面です。シャボン玉遊び、色水遊び、魚釣り遊び、樋をつなげて水路に水を流す遊びなど様々な水に触れて遊ぶ環境が設定されていました。「もっと大きなシャボン玉を作りたい。」と道具を変えながら何度も挑戦する姿や友達と「緑色ちょうだい。」「はいどうぞ。」と会話しながら自分の作りたい色水ジュースを作る姿など子どもたちは自ら環境にかかわり、遊びを展開していきます。そこには、自分を高める力や他者とつながる力の育ちが見られます。また樋の組み方によって高低差ができ、それによって水の流れ方が変わること気づくと「もっとシューって流れるようにしたい。」と自分のイメージする流れ方に近づけるため、試行錯誤する姿にも自分を高める力や自分と向き合う力の育ちを感じました。保育者が子どもの心が動く瞬間をとらえて、そこにかにかかわっていくのかということが、遊びの中の学びをより質の高いものに変えていきます。

子育てと教育を繋ぐ

非認知能力が育ちやすい環境は、アタッチメント（愛着形成）が安定していること、いざとなったら受け入れてくれる確信が心の力（非認知能力）を育むということが言われています。このことが、子育て教育 Next プロジェクトにおける子育てと教育を繋ぐ肝だと考えます。養育者とのかかわりを通して、心の絆をもち、人

への信頼感、他者への共感や人から学ぶ姿勢、自分自身への信頼感などにつながる芽が育ち、それらが非認知能力につながっていきます。

遊びの中の学びの姿、すなわち非認知能力が育っている姿を保護者にどのように伝えていくか、各園で様々な工夫をいただいています。その中でも、目の前の子どもにたっぷりの愛情を注ぐことが、非認知能力につながるということを改めて家庭・地域と共有していきたいと考えます。

心の解像度をあげる

子どもの心が動く（非認知能力が育つ）瞬間を捉え、子どもの姿により深い理解を行うため、保育者はさらに、自身の情報や思考、行動の量や質を向上させることが必要です。今後も就学前教育保育では、子どもと共に遊び、かかわり、活動を伴走する中で、保育者自身の心の解像度をあげて、一人一人の遊びの中の学びを支えていきたいと思っています。

栗東市3つの力と10の姿（幼児期の終わりまでに育ってほしい10の力との関連性）

栗東市 3つの力	栗東市 10の姿
自分を高める力	○自分のやりたいことをやる ことができる。 ○いろんなものやことにふれ ることができる。 ○感じたことや考えたことを 表現することができる。
自分と向き合う力	○しなければならないことが できる。 ○してよいことと悪いことが 理解できる。 ○あきらめないで続けること ができる。
他者とつながる力	○友達と伝え合いながらかか わり合うことができる。 ○友達と協力する中で自分を 役立てることができる。 ○家族や地域の人たちとかか わり合うことができる。 ○人以外の自然や生き物とか かわり合うことができる。



図書館司書より先生にすすめたい一冊

『ねえ、きいてみて！ みんな、それぞれちがうから』

ソニア・ソトマイヨール／文 ラファエル・ロペス／絵 汐文社

糖尿病や視覚障がいなど、持病や障がいをもつ子どもたちが、それぞれの方法で庭をつくろうとする。庭に育つ植物がひとつひとつ異なるように、人間の子どもも、ひとりひとりちがう。それぞれがもつ力を使い互いに助け合うことで、世界はより豊かになっていくことを、この本を通して感じてほしいです。

《図書館 小島美紅》



『いろはのあした』

魚住直子／作 あかね書房

「いろは」は、ちょっと気が強く、怒りっぽい小3の女の子。弟とけんかしたり、泣かないからという理由で、クラスメイトに「冷たい」と言われたり…。いろはは、その都度、どういうことなのか、これでよかったのかなと自分の心に問いかけていく。

この自問こそ、人が成長し続けるのに大切なことであると教えてくれます。

《図書館 西堀直美》

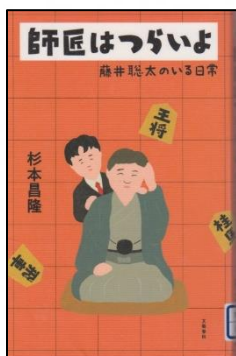
『めざせ！ ムシヨラン三ツ星』

黒柳桂子／著 朝日新聞出版

刑務所で管理栄養士として働き、受刑者に調理を教える著者。料理に不慣れな彼らは、基礎と思われる部分でも、想定外のハプニングや失敗を引き起こし…。

予算や使用する食材などの制約がある中で、美味しく楽しく食べてもらうために工夫を凝らす、その姿勢から、愛情とプライドを感じます。

《図書館 南川香乃》



『師匠はつらいよ 藤井聡太のいる日常』

杉本昌隆／著 文藝春秋

著者は、あの“藤井聡太竜王”の師匠。師の影を踏まないどころか飛び越えて行った弟子とのエピソードや、将棋界の知られざる話など盛りだくさんのエッセイ。自虐ネタや妄想ネタも多く、思わず笑ってしまう話ばかりです。結局、師匠はつらいのか…？ いや、結構楽しそうです。

《図書館 森本あつ子》



『ありのままの自分を出していこう ～ほかほか心でうんと遊ぼうだいほうっ子～』

本園は、子どもたちが「ああ、今日も楽しかった。

栗東市立大宝こども園

また明日も遊ぼう。」と思える園をめざして、遊び環境を整えたり、「昨日の続き」ができる登園後のひとときの遊び時間を大切にしたりしています。

また、子どもたちにとって職員の存在そのものが「人的環境」として大切であることから、園内研究では、子どもたちの姿を丁寧に見取り、必要な言葉かけや次につながる援助の仕方を職員間で話し合いながら学んでいます。この取り組みは、定期的に保護者にも発信していく予定です。

幼児期に五感を使って豊かな経験ができるよう、泥んこ遊びや運動遊び、造形遊びなど様々な遊びの場を用意していますが、中には、「できない」「したくない」などの気持ちを持つ子どももいます。このような時は、



ありのままの自分の気持ちが出せた姿を大切に受け止めています。そして「早く、うまくできることが良いのではないよ」ということを保育者の言動を通して伝え、「自分のやり方でいいんだ」という自信や「やってみよう」という前向きな気持ちを引き出していけるようにしています。子どもたちにとって、園が安心できる楽しい場所でありたいと考えています。



『非認知能力を軸にした教育活動』を校内研究から 栗東市立葉山東小学校

「みなさんは、自分の学校の学校教育目標が言えますか？」

「学校で育てたい学校教育目標が、『絵に書いた餅』になってしまっていないですか？」と、栗東子育て教育 Next プロジェクトのアドバイザーである中山芳一さんが、ことあるごとにお話されます。



本校は、Next プロジェクト研究推進校として、非認知能力を軸にした教育活動について校内研究を開始しました。

本校の学校教育目標は、「心豊かで 主体的に学ぶ子どもの育成」。そこで、今年度の校内研究を行うにあたり、「学校教育目標を絵に書いた餅にしない」ために、学校教育目標でめざすのは、子どものどのような姿なのかを話し合うことから始め、次のようになりました。

「心豊か」……自分の気持ち、意思をしっかりと持っている。相手の気持ちを受けとめることができる。
「主体的に学ぶ」……何事にも挑戦できる。見通しをもって粘り強く取り組む。

校長や研究主任が「こういう子どもの姿をめざしましょう。」と作ったのではなく、教職員が話し合いながらできあがったことに価値があると自負しています。

学校教育目標は、子どもに育みたい非認知能力そのものです。「学校教育目標の達成が子どもの非認知能力を育むことになり、それが、子どもの認知能力を高めることにつながる」という思いを共有しながら、一人の十歩でなく、みんなで一歩ずつ進む校内研に取り組んでいるところです。

また、「子どもたちに育みたい非認知能力」について、学校だよりで保護者の皆さんにお伝えしたり、地域の皆さんが参加される会議等に出向いて周知をしたりしています。地域の方の中には「自分たちができることはないか」と一緒に考えてくださる方もおられ、手ごたえを感じてきています。家庭・地域とも連携しながら非認知能力を育めるよう、「チームはやひが」で子どもと向き合う毎日です。